

平成29年10月5日



## 従容録に学ぶ（六〇）

### 第八〇則 龍牙過板

〔示衆〕衆に示して云く、大音は声希れにして、大器は晩成す。  
盛忙百鬧のなかに向いて呆の佯をし、ヒ古千年の後を待つて慢する。且道、是れ如何なる底の人ぞ？

#### 〔本則〕

舉ぐ、龍牙、翠微に問う、「如何なるか是れ祖師西來の意？」微云く、「我が与に禪板を過ち来れ！」牙、禪板を取つて翠微に与う。微、接得て便ち打つ。牙、云く、「打つことは即ち打つに任すも、要且は西來意無し。」又た臨濟に問う、「如何なるか是れ祖師西來の意？」濟云く、「我が与に蒲団を將ち来れ！」牙、蒲団を取つて臨濟に与う。濟、接得つて便ち打つ。「牙云く、打つことは即ち打つに任すも、要且は祖師の意無し。」牙、後に住院す。僧、問う、「和尚、當年、翠微と臨濟とに祖意を

問う、「二尊宿は明かせりや？」牙、云く、「明することは即ち明せるも、要且は祖意なし。」

『明珠』第二号（昭和六〇年一〇月）に「従容録に学ぶ（一）」を掲載して以来、今回が第六〇回とは感慨無量。でも『従容録』は全一〇〇則、つまり、まだ六割にすぎません。終わることなき求道の旅ですね。龍牙とは、洞山さまに嗣いだ龍牙居遁（八三五～九二三）のことです。この則の主人公。また、翠微は青原—石頭—天然—翠微と承ける翠微無字であり、臨済はいわすと知れた臨済義玄その人です。

この「本則」は、龍牙が雲水時代に翠微と臨済に参学して、「祖師西來意」という仏法の真髓（禪の堂奥）を質問した時の機縁と、のちに潭州龍牙山（湖南省長沙市益陽県）に住した際、門人から尋ねられて答えた機縁とから成っています。じつは、「本則」の語句一々には万松行秀さんによる長いコメントがつけられているのです



龍牙過版

まず、万松さんの「示衆」を意識します。

「大声を

出す人は、じつはめったに出さんし、大器といわれる人も、じつは晩成なのだ。どえらく忙しい中でもアホのようにふるまい、世の移り変わりの後まで悠揚としている者がおる。これははたしてだれかお分かりかな？

まず、タイトルの「過板」とは「本則」中の龍牙による臨済に対する行動から採ったもので、「禅板」は坐禅中に身を寄せて睡眠するための什具（カット参照）。「ヒ古」という妙な語は「化故」の省略語で年月の久しいこと。そしてこの「示衆」は、晩成の大器や心中も悠揚として動じない者に対する讚辞です。その者とは、いうまでもなく龍牙のこと。さあ、その「本則」を意訳しましよう。

龍牙が問うた。「仏法の真髓は？」と。「禅板を持ってきやれ。」持ってきて与えたら、翠微は一棒を下した。「打つのはよろしいが、そこには仏法の真髓などありますまい。」のち臨濟のところへ行つて同じ問い合わせをぶつけた。「坐蒲を持ってきやれ。」持ってきて与えるや、また打たれた。龍牙は翠微の時と同じ語をのべて立ち去つた。のち龍牙山に住した際、雲水が「むかし二老宿に仏法の極意を聞き、納得されましたか？」言葉は聞いたが、なかつたのですね。でもそののち、龍牙はさ

こんなところでしようか。原文の「祖師西來意」とはボダイジルマがインドから中国にやつてきた意味から、仏法の極意とか禪の真髓といふ意味で使われます。つまり、「この山を流れる水の流れが逆になつた」との一語で大悟徹底します。つまり、奥義や真髓などは己れの体験でズシーノと会得すべきなのです。翠微や臨済の棒打も、自得を促す愛の鞭だったのです。

龍牙は長い行脚修行の末、龍牙山に所住したのは五〇歳ごろになってから。そして、それから四〇年ほども禪風を振い、八九歳の高齢（唐代です！）で示寂。文字通り晩成した大器でした。同じころ、趙州從諗という六〇歳出家行脚、八〇歳で住持、一二〇歳示寂というスーパー禪哲もいましたが、やはり大器晩成といえるでしょう。

ところで、晩成の大器とはいいですね。特別な才覚などなくとも、若い時からコツコツと精進を惜しまなければ、普通の人でも老成できるからです。ただし、それではワシにも縁がないわけではないゾ、とウヌボレが入つたらダメ。精進というのは、愚の如く魯の如く成果などを求めずに、一〇年一日のごとく牛歩することです。曹洞宗の宗風は地味ながら、こうしたよき伝統があります。わたしたちの坐禅も、そうでなくてはなりません。



龍牙が大悟した洞山（2004年の風光）

體ということ。龍牙はこれを当時の著名な二老宿に尋ね、ともに納得できる機縁が得られなかつたのですね。でもそののち、龍牙はさ

らに禪哲たちに参じた最後に洞山の良价禪師をたずね、改めて「祖師西來意」を問い合わせた。洞山の「この山を流れる水の流れが逆になつた」との一語で大悟徹底します。つまり、奥義や真髓などは己れの体験でズシーノと会得すべきなのです。翠微や臨済の棒打も、自得を促す愛の鞭だったのです。

龍牙は長い行脚修行の末、龍牙山に所住したのは五〇歳ごろになってから。そして、それから四〇年ほども禪風を振い、八九歳の高齢（唐代です！）で示寂。文字通り晩成した大器でした。同じころ、趙州從諗という六〇歳出家行脚、八〇歳で住持、一二〇歳示寂というスーパー禪哲もいましたが、やはり大器晩成といえるでしょう。

ところで、晩成の大器とはいいですね。特別な才覚などなくとも、若い時からコツコツと精進を惜しまなければ、普通の人でも老成できるからです。ただし、それではワシにも縁がないわけではないゾ、とウヌボレが入つたらダメ。精進というのは、愚の如く魯の如く成果などを求めずに、一〇年一日のごとく牛歩することです。曹洞宗の宗風は地味ながら、こうしたよき伝統があります。わたしたちの坐禅も、そうでなくてはなりません。

## 特集 坐禅普及活動

### 坐禅体験会参加者の感想と課題

我孫子市 刑部 一郎

坐禅体験会は平成二六年八月二九日の第一回から約三年間に一二回開催されました。参加者の感想と課題を纏めて報告します。

参加団体は自衛隊四回、同好会三回、福祉団体二回、企業一回、柏フェスター一回。新聞の取材も一回ありました。総参加者は一八八名（男性一三一名、女性五七名）です。

参加者にアンケートを取った結果は①坐禅の初体験者八九%、②説明がよく分かった五六%、③法話が理解できた七〇%、④今後参禅会に来てみたいと思う五七%。

参加者の感想を大まかに分類します。

**(1) 坐禅堂の環境・雰囲気**

①坐禅堂は木の香りがして素晴らしい。②坐禅中に鶯や風の音が聞こえてきてよかったです。③坐禅堂の神聖な雰囲気で坐禅でき、心が落ち着いた。

**(2) 坐禅観に対する問い合わせ**

①何のために坐禅をするのか。②坐禅は禅の何なのか。

#### (3) 指導法に対する要望

初めてなので、専門的な言葉が分かり難かつた。②冊子を読む時間が欲しかった。③無に禅の目的に対する説明があると坐禅に臨みやすい。

**【総括】** (2) 項は老師の法話の中で説明がありますが、最初の説明はすぐ坐禅の作法から始まるので、坐禅観の説明を最初にやる必要があるようです。(2) 項、(3) 項の説明、指導法は坐禅普及委員会で検討中です。

#### (4) 法話

①百歳の親の介護に明け暮れ心のもちようを教えていただいた。②自分自身を良く知ることがカウンセラーとして大切だということなど今後の活動に役立つ内容だった。③初めて坐禅を体験したが、生と死を考えるきっかけになつた。④法話にあつた「努力こそ悟り」を肝に銘じてやつていただきたい。

**【総括】** 老師の法話は参加団体ごとに、最も適切な内容となるよう、しかも、短時間に簡潔にまとめられ、参加者のほとんどが良い感想を述べています。報告書を後で読み返すとその内容の素晴らしさに感銘しました。

#### (5) 坐禅全般

①良い体験をしました。今日の体験を大切にしたい。②心を整えて無になるということは日頃ないので大変良い機会だった。③無になることは難しいと思った。毎日を忙しく過ごしていく、気持に余裕がなくなることも多いので、今回の体験で心が落ち着いた。④椅子でも坐禅が出来ることを広く知らせた方がよいと感じた。⑤茶道は絶えず動くが、坐禅は動かない。しかし、その精神はよく似ている。茶道とか坐禅によつて人として成長できればと思う。

**【総括】** アンケート結果でも五七%の参加者は坐禅を体験して、今後、参禅会に来てみたいと回答しています。坐禅普及委員会では龍泉院の坐禅堂がさらに活発に利用していくだけるよう坐禅普及活動を行つてまいります。

### 坐禅普及委員会、最近の動き

柏市 五十嵐 嗣郎

最近の坐禅普及委員会の活動を報告します。五月一四日午前九時から一二時まで、パレット柏で初の「出張坐禅体験会」を開催しました。これは柏市に登録されている柏市民

公益活動団体を紹介する「柏市民活動フェス  
タ二〇一七」に、東葛坐禅クラブとして参加  
したものでした。

前日に坐蒲や絨毯などの備品や掛軸、ポス  
ター、写真などの掲示物を、龍泉院から松井  
さんの車で搬入。当日は午前九時より三〇分  
間で会場を設営し、九時半から坐禅体験会を  
開始しました。

当初、フェスター二〇一七への来場者が、さ  
ばき切れないほどいらっしゃるものと見込ん  
でいました。しかし、来場者は他のイベント  
の関係者ばかりで、一般の来場者は極めて少  
ないことが分かりました。

そこで、勧誘班を編成、パレット柏の入口  
で坐禅体験会のチラシを配り、これはと思う  
人を、強引とも思えるほどの説得で、坐禅体  
験会へご案内しました。午前九時半から始  
まった坐禅体験会は後片付けの関係上、午前  
一一時半に終了、体験者は一四名でした。

予定人数からは大幅に少なかったものの、  
参加された方からは「よい体験をさせてもら  
いました」と感謝の言葉を頂きました。パレッ  
ト柏での出張坐禅は今後も続けてたいと思つ  
ています。

ところで、坐禅普及委員会の委員は二〇名

でしたが、体調を崩された方や高齢で委員を  
外してほしいと希望される方もあり、委員を  
入れ替えました。新委員は次の通りです。

委員長 小畠節朗

副委員長 五十嵐嗣郎

広報係 五十嵐嗣郎 清水秀男 松井

座禅係 小山 齋 小畠二郎 鈴木民雄

庶務係 河本健治 佐藤修平

刑部一郎 山本 聰 小林裕次

山川 進

五月一四日、パレット柏のミーティング  
ルームで、「東葛坐禅クラブ」という形で、  
龍泉院参禪会の「出張体験坐禅会」が開催さ  
れました。

普及委員会のメンバーによる綿密な打ち合  
わせがなされていましたこともあり、九時から九  
時半に掛けてのわずか三〇分の間で、会場の  
セッティングがてきぱきと行われました。

新しい坐禅普及委員会ではこれまで行つて  
きた体験会を振り返り、坐禅指導方法などに  
ついて再検討します。新しい坐禅指導について  
ては坐禅係を中心に具体案を作成することに  
なっています。また、御老師からは外国人や  
子供向けの坐禅体験会を検討するようご指示  
が出ていますので、広報係を中心にプロモー  
ト先を探っているところです。

今、世間ではティク・ナット・ハン師の紹  
介したマインドフルネス冥想法が注目を浴  
び、心の安寧を求めて禅に対する関心が高  
まっています。坐禅を体験したいと思う人に  
その機会を用意することは、我々の役目であ  
り、行だと思います。

御老師が「最初から最後まで坐る」と仰せ  
られ、掛け軸の左側に坐られました。

## 出張体験坐禅会、裏方の声

柏市 坂牧 郁子

五月一四日、パレット柏のミーティング

ルームで、「東葛坐禅クラブ」という形で、  
龍泉院参禪会の「出張体験坐禅会」が開催さ

勧誘のビラ配り係と一緒に見えた最初の方は細身の若い男性。九時半ごろのことでした。

終わりの鐘を聞いてお茶の用意、体験に感動された様子でした。「接待は若者同士」と山本聰さんにお願いし、体験した方いろいろ伺つていただきました。教育学部に在籍の学生さんでした。

二番目は女性。坐禅は時間を決めて四回行う予定でしたが、いらした方々はそれぞれ予定を持ち、その合間に興味を持たれて体験しようという方々でしたので、時間に余裕がなく、その場の判断で「その都度行う」ことになりました。御老師は最後まで坐り続けられました。

坐禅を体験したことで、心がすっきりしたからでしょうか、参禅会でいつも出されているお茶を「新茶かと思いました」といううれしい言葉もいただきました。

また、後片付けが終わり、帰る時に最初に坐られた大学生がラウンジでノートを開いて勉強している姿を見かけました。少しづつ、坐禅が市井に広まつていくよう感じました。

予定の時間通りに撤収、「うどん市」で打ち上げを行いました。出席できない方は残りの和菓子を頂き帰路となりました。



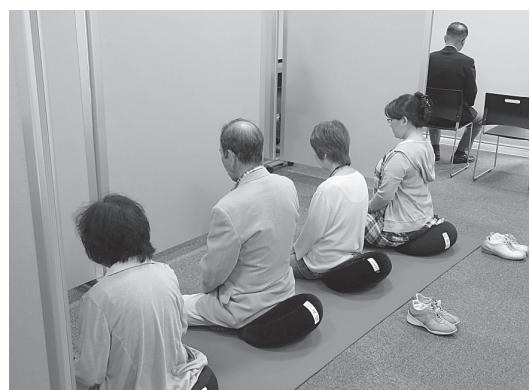
来場者への声掛け



受付で体験希望者を待つ



一通り作法を習い坐る体験者



多くの方に坐禅体験をしていただきました

# ポーランド人が坐禅体験

我孫子市 小畠 二郎

四月の日曜の朝、小畠代表幹事のお知り合いの方が連れてきたポーランド人の坐禅指導をお手伝いする貴重な経験をしました。

小畠さんからの事前の情報によると、大変ユニークなポーランド人で、日本にあこがれるあまり、自分の前世は日本人であったと心から信じ、かねがね日本に来て、禅を習ったいと思っていた奇特な人でした。のちに大統領になつたワレサ氏が指導したポーランド革命で有名になつた造船所のあるグダンスクという町で、英語と数学の私塾をやつて生計を立てていることも、あらかじめ聞いておりました。

当日は、あいにくの雨でしたが、朝の九時前に小山さんが開けておいてくれた坐禅堂で待つこと三〇分。後に聞いたところによると、この三〇分の間に、ご老師のお心遣いで、この方の緊張を解くため、事前に庫裏で御話をうかがつていたようでした。それにもかかわらず、坐禅堂に入ってきたときの本人の顔つきは、見るからに緊張している様子でした。

英語による坐禅指導は初めてでしたので、



ポーランドの禅客Jeff氏(左から二人目)

た。

本人は正坐どころか、坐った習慣がないので、坐蒲の上に坐ることもまともにできない様子でした。それでも、何とか坐蒲の上に腰をおろしてもらい、小山さんの打つ鐘を合図に、坐ること一〇分あまり。今度は、経行をはさんで、椅子坐禅に移り、やはり一〇分余り、坐つていただきました。

ほぼ三〇分間の坐禅体験を通じて、このポーランド人は、大変感激したようで、感謝の気持ちを率直に表現してくれました。坐禅堂の静かなたたずまいや、龍泉院を取り巻く自然環境の素晴らしさに、声をあげて感激していました。

また、英語で俳句を作つてることもあつ

私の方もやや緊張気味。まづ、基本的な動作の指導、つまり合掌・低頭・叉手・経行などマナー指導から始め、坐禅指導に入りました

最後に山門を出たところに「酒を飲んで山門に入つてはいけない」という文字を英訳しました。事がいらしたので、説明できましたが、これを英訳するには苦労しました。

今後の坐禅指導の国際化に向けて、反省点を二、三書かせていただきます。

外国人は坐ることが難しくても、単の上で一〇分でも坐つていていただくことが、本人にとって、大変良い経験になると思いました。

それと、英語その他の外国語は、簡単な言葉だけで十分です。例えば、Sit upright (背筋を伸ばして坐りなさい)とか、Turn to right (右に回りなさい) Breath slowly and quietly (ゆっくり静かに呼吸しなさい)とかの簡単な言葉を使って、あとは指導者が実際にやつたことをマネしてもらうことで十分だと思います。

坐禅指導そのものは、先にも申した通り、

それほどの困難がないように思いますが、禅の精神そのものについては、あらかじめ英語での表現を考えておく必要があると思います。御老師をはじめ皆様方のご意見をうかがうために、たたき台をいくつか提案させていただきます。

まず、東葛坐禪クラブのスローガンである「自未得度先度他」に関しては、清水秀男さんからいただいた角田駒澤大学教授の英訳から抜粋して、次のように提案します。

“Save all others before saving yourself”

最後の yourself は場合に応じて、oneself, myselfなどに変えてもよいと思います。

また、鈴木大拙氏の「仏教の大意」からとった言葉、智慧（大智）と慈悲（大悲）に関しても、“Wisdom and Mercy”がよいのではないかと感じます。

鈴木大拙氏は、Mercy の代わりに、Compassion を使っているようですが、「同情」よりも「慈悲」にぴったりなのは、Mercy なのではないかと思います。

最後に、外国人の坐禪体験のお手伝いをさせていただいたおかげで、相手から感謝されるよりも、こちらがよい体験をさせていただいたことに感謝する気持ちのよさを味わいました。

した。今後とも機会があれば、このような体験を行いたいと存じます。御老師をはじめ、小畠代表幹事、それに、さわやかな鐘の声を届けてくれた小山さんに感謝します。

## 寄稿

### 龍泉院参禅会に随喜して

曹洞宗総合研究センター 角田 隆真

法を「獅子吼」と言うのです。

一〇一七年六月二五日、龍泉院の参禅会に随喜させていただきました。「随喜」とは、「参加する」といった意味です。梅雨入りして二週間ほど経ち、時々雨がぱらつく曇り空の中、行われました。気温はそこまで高くはなかつたと思いますが、高い湿度のため、とても蒸し暑く感じられました。

今回は二回目の随喜であり、思い返せば前回は一〇一六年の一月でした。一年半ぶりの参加ということになります。一月でしたが、時節に反してそこまで寒かった記憶は残っていません。偶々暖かい日だったのでしょうか、それとも建物の中が暖かかったからでしょうか、あるいは緊張して寒かったことが記憶に残らなかつたからでしょうか。記憶とは意外

と頼りないものです。  
さて、禅語には「獅子吼」という言葉があります。『禅学大辞典』によると、「獅子吼」とは、

仏の説法のこと。仏の無畏の説法を百獸の王の獅子が咆吼する無畏音にたとえたもの。獅子が一吼すれば、百獸こと一切の外道の異見を摧破するからいう。

とあります。獅子が吼えるような仏様の説

法を「獅子吼」と言ふのです。  
龍泉院は郊外のとても静かな場所にあります。日曜日の朝、その静寂で薄暗い坐禅にふさわしいと言える環境の中で、二炷の坐禅が行じられます。その雰囲気だけでも身心が洗われますが、その坐禅中に椎名老師より発せられる口宣は、また格別のものであります。

内容もさることながら、椎名老師の低く重厚で落ち着いた声は、まさに獅子が吼えるようなものであり、「これを獅子吼と言うのだ！」と実感いたしました。

また機会がございましたら、椎名老師の「獅子吼」を聞きに参禅させていただきたいと願っております。

# 山内動静

## 降誕会（花まつり）

### 御老師、世界の安穏を祈る

お釈迦様の御誕生を祝う降誕会（花まつり）が平成二九年四月八日午後二時に開かれました。

梅花講の方々のご詠歌の中、先導小畠節朗さん、導師御老師、侍香松井隆さん、侍者小畠二郎さんの順で威儀正しく入堂され、莊重な雰囲気の中、肅々と行われました。殿鐘は小山齋さん、副堂は五十嵐嗣郎さん、維那は小畠節朗さんが務めました。

御老師は香語で「世界の民衆の安穏を祈るものなり」と唱えられました。新聞、テレビ

でシリアルの空軍基地をアメリカが攻撃したと報じられたばかりでした。

法要がとどこおりなく終わり、御老師が次

のようないふ話をなさいました。

「花まつり」は喜びのお祭りの法要です。ルンビニーの野に花が咲き誇っている中、お

釈迦様はお生まれになりました。この季節、当龍泉院でも一日ごとに風情が変わらほど、

次々に花が咲き、「花まつり」にふさわしい様子です。

お釈迦様はお生まれになった時、「天上天下唯我獨尊」といわれたと伝わっております。人は「生きる」ではなく、「生きていく」ことです。問題は生き様なのです。生きていくためには一に本能、二に適合、三に創造が必要です。

適合することは、環境に合わせて生きてい

く、頭を使つたり、努力することが必要です。

創造することは、新しく創り出すことです。

その人にしかできないことがあります。あなたにしかできないことをするために、この世に生まれてきたのです。これが「天上天下唯我獨尊」であり、このことを自覚することです。

「散るさくら 残るさくらも 散るさくら」という句があります。さくらは散ると、やがて新しい葉が芽吹き出すことでしよう。

今回の花まつりの参加者は御老師、梅花講七名、檀家の方四名、参禪会一一名の合計二三名でした。法要の後、一炷の坐禅を組み、龍泉院心尽くしの甘茶と和菓子で談笑し、散会しました。

散会後、境内を巡つてみました。連翹（れ

んぎょう）のあとやかな黄色、土佐みずきの

淡い黄、海棠（かいどう）の濃いピンク、馬

酔木（あぜび）のかわいい白、足下にはとり

どりの水仙、赤い斑入りの椿、大悲殿前の大輪の白椿、芽吹きの始まった木々など、龍泉院は美しく彩られていました。

作務の方々の丹精のおかげです。ありがとうございました。

合掌

### 坐禅作法

四月の例会では毎年、御老師から年一回の坐禅作法のお話があります。その後、参禪会員が日ごろ疑問に思っていることをおうかがいする問答があります。

今年は注意事項として次の五点が挙げされました。

る揖手を基本とする。また足の運びは必ず一呼吸に半歩前進し、一息半歩にする

こと。他のやり方もあるが、龍泉院参禅会では澤木興道流の経行を行う。

⑤ 経行の後、堂内を一周する時は足取りを早めるように心掛けること。



参禅会員との一問一答の概要は次の通りです。

問.. 坐禅に入るときの問訊はどうしたらよい

答.. 坐禅に入るときはまず隣位問訊し、その後、対座問訊をします。坐禅が終わって单から降りた後はまず対座問訊を行い、次いで隣位問訊をします。

問.. 経行の時の叉手はどうしますか。

答.. 最初は手の甲を上にして揖手とし、終わつて歩く時は手の甲を前にして叉手を組みます。手は少し体から離します。（写真参照）

問.. 左右搖振のときには手はどこに置きますか。

答.. ひざの上に置きます。

問.. 坐禅中もよおしてきたら。

答.. 事前にお手洗いに行っておくべきですが、急に体が不調になることがあります。そ

のような時は、直堂がいる時はそれに小声で断つてお手洗いに行きます。いない場合は静かに行きます。

問.. 坐禅中は目をつぶってはいけませんか。

答.. いけません。半眼を保つべきです。目を見開きすぎるのは良くないです

が、特別意識しなくても坐相をととのえると自然に半眼になります。

問.. 警策の時強く打つと肩甲骨にひびが入る恐れがあります。どの程度がよいのでしょうか。

答.. ポンとよい音が出る程度がよいし、痛くありません。打ちおろすのではなく跳ね上げるのがよい。冬は厚着なので強く、夏は薄着なので弱く打つとよい。

問.. 腰痛で痛み止めの薬を飲んでいますが、これだと眠くなります。痛み止めの薬を飲まずに椅子坐禅をするべきでしょうか。

答.. 坐禅は各人の行です。体調に合わせて各自判断すべきです。しかし、無理は禁物です。



経行時の叉手の形（揖手）



単への上がり方を実演される御老師



御老師の説明を聞く会員諸氏



和やかに回答される御老師



疑問点を質問する会員



会員の質問に耳を傾ける御老師

## 快晴にめぐまれ禅修行

六月三、四日の二日間、龍泉院参禪会の一  
夜接心が行われました。今年は晴天に恵まれ、  
初夏の清々しい気候の中での接心行でした。

お寺に泊まり込み、七炷（七回）も坐禅を  
すると聞くと「ムリ！」と思ってしまうかも  
しれませんが思い

切つてやつてみると案外なんとか坐

れてしまうもので

す。お寺の里山的  
な環境にも癒され  
ます。

入会してまだ体  
験されていない方  
はぜひ来年参加し  
てください。接心  
でしか味わえない  
素晴らしい経験が  
できます。

◇ ◇  
①初夏のひざし  
に白壁がさえ  
る雲堂（坐禪

堂)

②差定（スケジュール）を読み上げる小畑

代表幹事

③行茶の手順などについて打ち合わせ

④ユーモアも交え禅講をされる御老師

⑤禅講に聞き入る会員

⑥典座寮の一幕

⑦精進料理とは思えないおいしい食事

⑧茶話会の支度

## 施食会

参禪会員一九名がお手伝い

龍泉院最大の年間行事「施食会」が八月  
一六日、行われました。

法要に先立ち曹洞宗東京管内説教師川上宗  
勇師（東京永伝寺住職）の法話があり、二時  
から法要が始まり、三時過ぎに終了しました。  
龍泉院が曹洞宗になつて毎年施食会が行わ  
ていたとすると、今回が六七五回目になるそ  
うです。

参禪会からは一九名がお手伝いに参加、侍  
者は山本聰、先導役は鈴木民雄、侍香松井隆、  
殿鐘は小山齋の各氏が勤めました。終了後、  
心づくしの食事を振る舞われ、四時過ぎ解散  
しました。

## 【川上宗勇師の話】合掌



法要で導師を務められる御老師

せんでした。

それを見た父親が「悲しいのは自分だけではない」と分かり、その後、家族みんなが合掌するようになりました。人をおもんばかりる心を形にしたのが合掌です。是非、お帰りになつたら仮縫に手を合わせてください。

ここ数年、年齢を重ねるとともに、神社、

ある時、孫を亡くし悲しみに打ちひしがれていた祖母に出会いました。「毎日外に出て花を一輪採ってきて仮縫にあげなさい」と言つたところ、実行され、毎朝泣いていました。亡くなつたお孫さんの兄弟は泣きたいのをじつと我慢していた様子で、なにもいいませんでした。

そのを見た父親が「悲しいのは自分だけではない」と分かり、その後、家族みんなが合掌するようになりました。人をおもんばかりる心を形にしたのが合掌です。是非、お帰りになつたら仮縫に手を合わせてください。

皆さんは合掌してお祈りしていますが、これは実は大変なことなのです。私は刑務所で教誨師をしておりますが、受刑者には仮縫がない、人のつながりもなく、お祈りをすることができない人もいます。

ある時、孫を亡くし悲しみに打ちひしがれていた祖母に出会いました。「毎日外に出て花を一輪採ってきて仮縫にあげなさい」と言つたところ、実行され、毎朝泣いていました。亡くなつたお孫さんの兄弟は泣きたいのをじつと我慢していた様子で、なにもいいませんでした。

## 想う事

### 参禅会と私

我孫子市 山本 三朗

昨年の十月初旬、インターネットで龍泉院のホームページに出会い、坐禅のお願いをしましたところ、月例参禅会を勧められ、十月の月例会より参加させていただき、間もなく一年になろうとしています。

坐禅の申し込みは心の迷いの沈静と安心を求めてのことでした。未だ未熟で安心を得るには、ほど遠い状態であります。ただ、入会時と比べますと、御老師の講話や在家得度の諸先輩方の活動を見聞するにつれ、少しずつではありますが、穏やかになりつつあるのを感じております。

坐禅との拘わりについてですが、実家が曹洞宗寺院でしたので、手元に修証議、般若心経などがあり、自然な形で接しておりました。ただ、若いときはなかなか興味が持てず、特別な時だけの修証議であり、般若心経がありました。

それは実は大変なことなのです。私は刑務所で教誨師をしておりますが、受刑者には仮縫がない、人のつながりもなく、お祈りをすることができない人もいます。

寺院に参拝する機会が増えており、曹洞宗寺院に限らず、見聞きしているところです。

年齢的にはまだ遅い修学ですが、これからも引き続き、参禅会に参加させていただき、御老師や諸先輩方の指導を賜りながら、勤めていければと願っています。

合掌

## 想う事

我孫子市 山本 三朗

### ただひたすら坐りたい

我孫子市 荒木 幸一

五月以降、自由参禅には数回参加させていただいておりましたが、今回、七月の定例参禅会に初めて参加させていただきました。

(1)

坐禅にはいつのころからか興味を抱いておりましたが、どのように始めたらしいのかインターネットで調べていました。すると、土

日などに坐禅会が開催され、初めての人にも指導してくださいるお寺が都内には結構あることを知り、四月にあるお寺の参禅会に二回ほど足を運びました。

しかし、我孫子から都内へ電車賃や都度の参加費や往復の時間を費やして行くのもと思いつい、近くに坐禅をしているお寺がないか探しおりましたが、なんと近くにあるではないですか。そういう経緯で龍泉院さんに通うようになりました。

坐禪歴は四ヶ月ほどでまだまだ、心を整えるとか、坐禪の何たるかなど分かつてないのが正直なところですが、もう少し続けていきたいと思っています。

なぜなら、坐禪だけでなく、般若心経などの教典や禪語にも少し接するようになりますが、これまで眼を向けなかつたこれらのことに、今までと違う気持ちで眼を向けてみると、興味を持ちつある自分がいることに少し驚いているからです。

ともあれ、坐禪には一步足を踏み入れたばかりですが、ただひたすら坐ることを実践してみようと思っています。どうぞよろしくご指導下さい。

## 典座見習い

白井市 佐藤 修平

六月三～四日の「一夜接心」、普段、厨房に立つことが少ない私が軽い気持ちで典座手伝いに手をあげた。

三日正午過ぎに上山、薬石の準備・下拵えが早速始まり、薬石（夕食）が始まると立ちっぱなしの作業が続く。夜の二炷目と三炷目の坐禪、交流会を経て、翌日の食事の下拵えを終え就寝したのは二三時半であった。

結局、一夜接心の七炷のうち坐れたのは三炷だけで、二回の禪講にも参加能わず、ひたすら厨房での作業に追われた。「くたびれた」、「大変な仕事だ」が率直な感想。一〇年も続けておられる松井さん、小山さんのご苦労はいかばかりのものか。

さて、交流会時、松井典座に声をかけられた。「佐藤さん、『典座教訓』を読んできたか?」「否・いえ」「典座教訓に書かれている『三心』——喜心、老心、大心、その最初の喜心——料理を作らせてもらえる喜び、食べていただける喜びが大事」と教えられる。翌四日

早朝、初日都合の悪かった小山さんが「男の料理 匠の会」と刺繡された真っ白な前掛けをキリリと締め現れた。風邪で喉がやられガラガラのドスのきいた声で、お粥を炊く私に「水が足りない」。盛り付けに手間取ると「俺がやる」。典座のお二人にいろいろと教えていただいた一夜接心であつた。

実は、このお二人、松井さんと小山さんは作務班の大先達でもあり、三年目に入った私の作務活動において常に尊敬するお二人でもある。喜心・老心は作務にも通ずる。

冒頭、「初めての典座手伝いで大いにくたびれた」と述べたが、後日、『典座教訓』に

次の言葉をみつけた。「典座の職は是れ衆僧の弁食を掌る。若し道心無くんば徒に辛苦を勞して畢竟益無し」。私には道心が無かつた。さて、皆様、食事はいかがでしたか?美味しく召し上がつていただけたでしょうか?五觀の偈の第二には「二つには己が徳行の全欠と付つて（はかつて）供（く）に応ず」とあります。即ち「私はこの食事をいただくだけの徳行をしたかどうかを省みて食事を頂戴する」。食事を用意するのも、いたたくのも簡単ではありません。

## 参禅二〇年に思う

柏市 加藤 孝

私達（妻と私）が参禅会に受け入れて戴いたのは、極めて偶然の結果でした。

それは、今は亡き妻和子が房総鋸山の名刹日本寺の藤井徳禪御老師に（畏れ多くも）「是非お伺いしてお話を聞きしたい」旨の手紙を出し、藤井御老師の快諾を得て上山出来たからです。東京湾を見下ろす書院の様な部屋に通され、見ず知らずの私達に、禪につき、仏道につき、優しくお話して下さいました。

その日の帰路、偶々「参禅道場龍泉院」の看板を見て、日を経ずして椎名御老師にお会

いすることが出来、入会を許されました。参禅会の模様は皆様が御承知の通りです。参禅会で最も感じ入りましたのは、御老師の博識と禅導への厳しいご気迫、さらに背景にある優しさでした。

とりわけ印象的な場面は、坐禅中に弛緩した空気を感じとられた時に警策でバーンと床を叩き、大音声で「眠るな！」と一喝されたこと、茶話会の時に、坐禅や仏道以外の話題、すなわち私的な世間話に終始し、井戸端会議の様な雰囲気の時に、重々しく「ここは修行の場です」と注意されたことです。

参禅会に惹かれた理由は他にも多々あります、あと一つ述べさせて戴くと会の運営が小畑代表幹事をはじめとして、誠に心地よく感じたことです。人が集合するところ、派閥的な動きが必然的に生じがちですが、それは皆無でした。このような参禅会であり得

いたのは小畑さん、杉浦さん、五十嵐さんなどお陰であると思っています。

私が昨年の成道会で参禅二〇年記念の御老師直筆の大額を頂戴出来ましたのも、御老師や素晴らしい先輩諸氏、道友のお陰であると心中より感謝しております。大額の揮毫は「柔軟に」。ズバリ私の欠点を見透した戒めの言葉であります。

私には生来硬直的な思考傾向があり、悩んでおりました。この性向を叩き直したいと考えていたことが禅に惹かれた動機でした。的確なお言葉を戴き、有り難うございました。この大額は我が家の中宝として仏間に掲げて毎日拝んでいる次第です。

## 坐禅との出会い

柏市 霜崎 美穂

昨年一二月から参禅させていただいています。

大学四年生の時、実の母親に「殺してやると脅され、私は「死の不思議と恐怖」に出会いました。そもそも殺されたらこの意識はどうへ行くのか。存在とは、宇宙とは…。自分の理解を超えた「実存」に堪え難い気持ち悪さを覚え（まさにサルトルの『嘔吐』だった

と思います）、毎日、朝を迎えることに怯えていたのを覚えています。

私は思想や宗教に救いを求めるべくインターネットの海をさまよいました。神や魂の存在を以ってこの世の成り立ちを説く思想は耳触りがよかつたものの、それを信じることはできませんでした。そして、最後にたどり着いたのが仏教の考え方です。

特に心に刺さったのが御釈迦様の「毒矢のたとえ」です。「世界や存在のことなんて考えても理解できる前に命が尽きてしまうから、いま目の前にある苦しみをなくすことには専念しなさい」と。このストイックさが、結果として私にとっての救いとなつたのです。

私は恐れ多くも仏教徒とは言えない世俗的な人間ですが、その教えが今も心の支えとなり、故にその実践として、皆様と坐禅をご一緒させていただいています。若輩者ですがどうぞよろしくお願ひ致します。

## 寺子屋で学んだ「生と死」

我孫子市 清水 秀男

寺子屋で学んだことそれは生きるということ みんなと話ができる



息をしていられる それが今を生きている  
寺子屋で学んだこと 証明

それは死ぬということ 人は死ぬと生き返  
らない でも生きている間に その人がしてきたこ  
とでみんなの心にその人のことが 残る  
か残らないかが決まる

寺子屋で学んだこと 死ぬと全てが無になる訳ではないこと  
生きている間 私たちがしたことが 死ん  
だ後まで残るのならば 私は今を くいのないよう<sup>1</sup>に生きていく  
精いっぱい 力強く

この詩の作者は宮城県栗原市の小学六年生  
の女の子です。この詩が出来た経緯を簡単に  
説明します。栗原市の曹洞宗 通大寺で、毎  
年小学生の寺小屋合宿を企画し「命の授業」  
をしていて、その中で、通大寺徒弟で東北大  
病院緩和医療科に勤務している臨床宗教教師の  
金田諦晃氏が話した内容がきっかけです。  
その内容は緩和ケア病棟に入院している末  
期がんの男性との会話です。体の痛みと、今  
まで家族に迷惑を掛け続けてきたことを償い  
たいと心の痛みも抱えた男性は、こんな自分

の為に必死に献身的に尽くして貢うスタッフ  
の方々への感謝の念であふれています。

金田さんが「明日自坊で寺小屋合宿がある  
ので子ども達に伝えたいことはありますか」  
と問い合わせたのに対し、男性は「人は人に助  
けられて生きているのだと伝えてください」  
と答えました。

金田さんは翌日子ども達に、病棟での看取  
りの経験から、人はどのように死を迎えるか  
を具体的に語り、そして、その男性の身心の  
痛みの中から絞り出した自分の人生の結論と  
も言うべき言葉を伝えました。子ども達は、  
身じろぎもせず真剣に聞き入ったといわれて  
ます。

翌日、既に会話もままならない状態になつ  
ていた男性に、その時の様子を写真を見せな  
がら伝えたところ、しつかり頷き、その後ま  
もなく息を引き取りました。

この寺小屋合宿に参加していた女の子が感  
想として書いた詩が、上記の「寺子屋で学ん  
だ『生と死』」です。生と死と死後について  
言及した宗教的感性に満ちた詩で感銘を受け  
ました。

この詩を私なりに味わってみます。  
「今生きているということは、呼吸ができ、  
思う」

皆と話をしたり遊んだりできること。即ち、  
当たり前のことが当たり前にできることが有  
難い生の真実の証である。そして、人間は必  
ず死を迎える。しかし、肉体的死を迎えても、  
その人が人生をどう生きたかによつて、人々  
の心の中にその人のことが、残るかどうかが  
おのずと決定していく。死によつて無に帰し  
てしまうのではなく、死後その人の生前の生き  
様が残つていくのであれば、生きている今の  
一瞬一瞬を大切に、力強く、志を持ち、最善  
を尽くして後悔無き様、生き抜いていきた  
い」。

男性の生き様や苦しみ中で紡いだ言葉が、  
この様に子ども達の心の中に伝わり、生と死  
を考える機会となり、「今を くいのないよう  
に生きていく 精いっぱい 力強く」という  
生きる勇気と力となつて伝承されたと言えま  
す。それは同時に、男性が死後も人々の心の  
中で生き生きと生き続けている事を示すもの  
と言えるのではないでしようか。

金田さんは、次の様に結んでいます。  
「男性は最期まで苦しんだが、子ども達の  
生きる力になつた。死に向き合う現場で生ま  
れたものは、生につなげなければいけないと

# 寺田哲朗氏を悼む

松戸市 小畠 節朗

本年二月、龍泉院参禪会草創期からの会員、寺田哲朗さんが逝去されました。葬儀祭壇の遺影は何時ものようにこやかで、今にも語り掛けるが如きでした。

想えば参禪会草創期の道友がまた一人幽冥境を隔ててしましました。行年八二歳。四〇年の長きに涉る参禪弁道であつた。

昭和五〇年代初期の参禪者は一〇名足らずで、茅葺の旧本堂で坐禪二炷の間に経行が入り、その後提唱と言うスタイルは今日と変りません。

だが、茅葺で仄暗い旧本堂は夏は爽やかな風が通り涼しいが、冬は逆で寒さの中での坐禪で寺田さんの温顔と共に今更ながら懐かしい。

寺田さんは千葉市在住、しかも、古河電工の要職で遠距離また激務の中での弁道でした。また臨済禅にも直参されて居て、その参究も深い処を極めて居られましたが、それを殊更誇示することは無く何時も淡淡と坐つておられた。

最後にお会いしたのは昨年四月一五日参禪

会発足四五周念記念「在家得度式」で共に再得度を受けた時です。それが今生の別れとなりました。

お元気な時は一夜接心、成道会には必ず参加され、成道会の問答は率先して問い合わせを発し正しく得を得たものでした。『明珠』五三号の「良寛さんに逢えた旅」にその消息が見られます。

『明珠』には第二号より一八回寄稿されています。特筆すべきは第二四号（平成八年



御老師と問答する寺田さん

一〇月）の中国五山巡拝記念号に寺田さんと共に奥様の寺田廣葉さんの「車窓に見たもう一つの風景」が掲載されたことです。

寺田さんの人となりを奥様が素晴らしい文章で表現されました。奥様は終戦の時、銃声を背に浴びながら三八度線を越えた経験があり、物見遊山的中国旅行には抵抗があつたが寺田さんの説得で夫妻での旅行になつたそうです。

「ロマンチックだけど生まれながらの技術屋、人間の心は私の方が少しわかるかも知れない、しかしこんな私の思い上がりは木端微塵に打ち碎かれました。強く見えたけれど夫にも苦しい日があつたのだと気づきました。はじめて夫の学んだ禪に興味がわきました。ウワーわたしの知らない事ばかり：人はみんな迷い苦しみながら何百年もかかつてきちんと答を出していたのだ」。

奥様に日頃のご自身の精神活動をかくも理解させ共感させ得る人は本当に少ない。誠実無比な方であります。

「真金は鍛金せず」いう金言がありますが、何時も底光りして眞の教養人だった寺田哲朗さんを追慕すること頻りであります。

合掌

# 沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】

(一)

内は座談の司会者

平成二九年

●三月二六日 二八名  
(富沢 日出夫氏)

二八名

●四月二三日 三一名  
(佐藤 修平氏)

三一名

●五月二八日 (河本 健治氏) 三二名

三二名

●六月二五日 小畠 駿朗氏 三〇名  
松井 隆氏 三〇名

小畠 駿朗氏 三〇名

松井 隆氏 三〇名

●六月三・四日 二三名  
(富沢 日出夫氏)

二三名  
二八日(一名)

●八月四日(五名)、一二日(九名)

二八日(一名)

●八月八日(六名)

二八日(一名)

## 龍泉院参禅会簡介

【参禅】

一、定例参禅会

・日 時 每月第四日曜九時(初参加者は八時半) 来山、正午解散

・口宣、坐禅、経行、坐禅の順

・木版三通、開経偈、『正法眼藏』の提唱

・自己紹介・喫茶・座談

・座談 (坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

・日 時 每月第一日曜と第二土曜九時から正午まで

・坐 禅 九時から一時まで(入退堂自由)

・作 務 一一時から正午まで坐禅堂掃除

・※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一夜接心 本年は六月七～八日、一泊し七炷の坐禅と提唱等

二、成道会 本年は一二月七日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

三、他の行事

涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会(八月一六日) 手伝い、歳末煤払い(一二月例会後)

四、作務 每月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)

二、『口宣』(年一回)

〔ウェブサイト〕 <http://www.yusenin.org/> 『明珠』『口宣』

のバックナンバーがご覧になれます

印 発 行／天徳山龍泉院 千葉県柏市泉1-8-8

04(7191)1609  
03(5724)7302

【自由参禅】

●三月十五日 九名、一日(九名) 一九名

●四月二日 九名、八日(八名) 二八名

●五月七日 一〇名、一三日(八名) 二八名

●六月一〇日 九名 二九名

●七月二日 一二名、八日(七名) 二九名

●八月六日 一二名、二二日(一〇名) 二九名

【奉仕作務】

●三月三日(六名)、一日(七名) 二九名

●四月二日(四名)、七日(五名) 二九名

●五月五日(八名)、一四日(二名) 二九名

●六月二日(九名) 二九名

●七月二日(六名)、六日(一名) 二九名

●七月二日(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の百日草】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の供花】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の救濟】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の百日草】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の供花】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の救済】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の百日草】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の供花】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の救済】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の百日草】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の供花】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の救済】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の百日草】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の供花】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の救済】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の百日草】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の供花】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の救済】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の百日草】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の供花】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の救済】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)、一〇日(七名) 二九名

●五月(一一名)、一六日(六名) 二九名

●六月(二名)、一〇日(一名) 二九名

●七月(六名)、六日(一名) 二九名

●七月(五名)、八日(五名) 二九名

【春の植樹】

●三月(八名)、一九日(七名) 二九名

●四月(七名)